



☆ 認知症を発症した方への関わり方・・・発症前のやり方で

認知症のお母さんを、長年介護された方から学ばせていただいたことの一つを記します。同居されているお母さんが、トイレを洋式にしてから下の始末ができなくなりました。幾度、トイレトペーパーの使い方を教えても、新しいことは覚えられず困ってしまわれたそうです。そこで、昔から使っていた「落とし紙」の使用を思いつかれました。「落とし紙」を入れる箱作りを、お母さんと一緒に楽しみながら作ってみよう・・・と。きれいな色紙を貼った箱の周りには、お母さんの大好きな花を作って飾り、とても美しい箱が出来上がったとの事です。それ以後お母さんは、その美しい箱に入った「落とし紙」を使い、下の始末が以前のようにできるようになられたそうです。

このことですばらしいのは、新しいことができなくなっても、認知症を発症する前に出来ていたことを活かす方法を思いついたこと。お母さんと一緒に楽しみながら、お母さんが喜ばれる箱を作ったことです。

このお話は、認知症を発症した方と関わっていく中で、いろいろと応用できるのではないかという思いと同時に、この方の温かな愛情を深く心に刻みながら聞かせていただき、消えることのない貴重な学びとなりました。
(松尾 記)

☆ 認知症の種類・・・レビー小体型（原因と症状）

(原因) パーキンソン病と同じ病変が、脳内の運動機能に関係する場所だけでなく、認知機能を担う場所にも起きるため、認知症を発症するといわれています。近年研究が進み、注目を浴びるようになってきた認知症です。

(症状) 発症率は約17%といわれています。初期ではアルツハイマー型と同じく、記憶障害など認知症の症状が穏やかに発症します。症状の特徴としては、幻視（実際には存在しないものが見える・・・「子供がそこに立っている」「虫が這っている」等）が現れることです。幻視は暗くなると現れやすくなります。また、気分の良いときは通常の会話も成立しますが、気分の悪いときは話が混乱するなどといったことが、一日の中で幾度も起きます。身体的には症状の進行中に、パーキンソン病に似た歩行の障害（小刻み歩行・前かがみ・すくみ足・・・）や、体の硬さを伴うようになってきます。

☆ サインを見逃さずに・・・クラス会・同窓会の利用

今回は見方を変えて、気づきのための工夫をお知らせしたいと思います。それはクラス会、同窓会の利用についてです。認知機能の低下などの本人の変化に気づくのは、普段一緒に生活している家族よりも、クラス会などで久しぶり（多くはほぼ1年ぶり）に会う友人たちの事が多いそうです。「あいつなんだかおかしくないか、去年とは明らかに違うよな」など複数の目で確認できる点や、家族よりは冷静に観察判断が出来ることと1年近く接していないことから違いがより鮮明になることも気づく原因だと考えられます。

このことは先日実施された学習会「認知症あれ・これ」で講師の後藤栄子先生から伺った話で、正に目から鱗でした。状況の許す限り積極的に、クラス会・同窓会を利用しては如何でしょうか。
(福原 記)

『私の忘れもの』は、「福祉のまちづくりパートナーシップ区民活動支援事業」の助成をうけて印刷されています。

お問い合わせは「白い箱の会」事務局（松尾方 TEL:FAX 3998-9006）まで。